

キリシタン文献・ローマ字写本における ` と ー について

— 「バレット写本」を中心に —

千葉 軒士

要旨

日本の中世キリシタン文献・日本文ローマ字写本の「バレット写本」では複数のアセント符号が用いられている。その中で、` と ー は共に撥音、濁音前鼻音、鼻音、省略などに対応する箇所が付される。この事実のみを取り上げれば、この二つの符号は同一符号の自由変異と捉えられそうである。ただ森田(1976)によると、この二つの違いは書記上の都合と指摘されている。が、それ以上の詳細な記述はなされていない。そこで、この二つのアセント符号が当該文献内で使用される箇所を精査していくと、ーはその付される文字の上の物理的スペースが無い際に主として用いられるアセント符号であることがわかる。この環境下では孤を描く形状で記される ` は用いることが難しい。物理的スペースの有無という書記上の都合により、` を描くことが出来ない際にーは用いられていた。このことから ` と ー は同一符号の環境変異であったことが推測される。

1. はじめに

日本語史研究において中世のキリシタン文献を利用する利点は、キリシタンという日本語を母語としない話者の外なる視点で日本語が捉えられている点にある。内なる視点のみでは気付きたい事象を様々に彼等が書き記したために、当時の日本語の姿を知るうえで有効にこの文献群は用いられ、日本語史研究に大いに寄与したことは揺るがぬ事実であろう。が、キリシタン文献に書き残された情報をそのままに受け取り、十分な考慮を経ることなく、当該文献が研究等に利用されたのもまた事実ではないかと筆者は考える。このように行われてきた従来の研究に対し筆者は、まずキリシタン文献が、どのような条件の下で作成され、どのように描かれていたのかを精確にとらえることがキリシタン文献を用いた研究のスタートになるのではないかと考える。それを十分に踏まえることで、キリシタン文献で記された情報を明確に理解することが可能となり、この文献群が日本語史研究にさらなる知見を加えることにつながるのではないか。これは、キリシタン文献には何が書かれているかよりも先に、そもそもどのように書かれていたかを見極める行為であると考えられる。


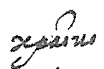
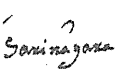

このような見方でキリシタン文献を見ていく中で、長音と対応する箇所を用いられる ` と ` の二つのアセント符号が物理的スペースによっていずれかが選ばれるといった問題を千葉(2007)で示した。本稿では、このような物理的スペースによって、描かれる形状が異なるアセント符号が他にもあることを示すとともに、このことからある機能と対応するアセント符号の中には、ある形状で描かれなければならないという必然がなかったものもあったということも示す。

2. ` と ー の関係





日本の中世キリシタン文献の「バレット写本」ではローマ字日本文が用いられる¹。キリシタン文献日本文ローマ字本で日本語を記す際には、ローマ字のみでなく、アセント符号も複数用いられる。そのアセント符号のうち、` と ー という二つのアセント符号に注目する。この

2つのアセント符号は当該写本で以下のように用いられる²。

① ~

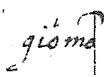

-  (汝達) 46r08 撥音と対応している
-  (キリシタン) 127r09 鼻音と対応している
-  (さりながら) 93v18 濁音前鼻音と対応している
-  (que の省略) 93v10 注 省略箇所と対応している

② -


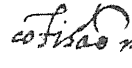
-  (汝) 46r01 撥音と対応している
-  (キリシタン) 131r07 鼻音と対応している
-  (下り) 29v02 濁音前鼻音と対応している
-  (que の省略、naō) 341r11 注 省略箇所と対応している

ここにあげた例を見ると、~ は撥音、鼻音、濁音前鼻音、省略と対応する箇所 で用いられ、一方 - もまた同じ機能と対応する箇所 で用いられる。「バレット写本」の書写者であるバレットはこの二つの形状の違うアセント符号をとともに撥音、鼻音、濁音前鼻音、省略と対応する箇所 で用いたようである。また「バレット写本」内の 132r-155v を記した別筆者³もまた ~ と - を用いている。以下に示そう。

③ ~

-  (経文) 153v18 撥音と対応している⁴
-  (「聖」を意味する saō) 153v08 鼻音と対応している

④ -

-  (恩) 149v17 撥音と対応している
-  (「告解」を意味する cōfissao) 149v10 鼻音と対応している

別筆者は ~ と - を撥音と鼻音などに対応させて用いている。この ~ と - に対応する機能別の使用数を示すと以下の表 1 のようになる。

・表1 ~ と - の筆者ごとの対応する機能別の使用数

	撥音	鼻音	濁音前鼻音	省略	総数
バレットの記した ~	353	314	47	7	721
バレットの記した -	212	156	30	13	411
別筆者の記した ~	2	15	0	24	41
別筆者の記した -	3	21	0	1	25

表1からまず別筆者は濁音前鼻音に ~ と - を用いていないことがわかる⁵。このことが両者の ~ と - を用いて示そうとした機能の違いを示すものなのかも知れない。しかし両筆者の記す ~ と - は共に撥音、鼻音、省略といった機能では対応しており、バレットと別筆者が共に ~ と - を機能別で使い分けて用いていたとは考えにくいのではないか。両筆者は筆者ごとに対応する機能の範囲に違いは見られるものの、この二つの符号をほぼ同一の環境で利用している。この事実から考えればこの符号は、同一符号の自由変異かとも見て取ることができよう。ではなぜ同一の機能を示すためにこの二つの符号が併用されていたのかについて本稿では考察していく。

3. ~ と - が付される母音字とそれに後続する子音字

~ と - の付される環境の違いをさらに細かく見ていこう。~ と - は省略を示す際以外は、ほぼ母音字に付される。この母音字の違いによって、付される違いなどは見られるだろうか。また後続する子音の影響で表れやすいなどの違いは見られるだろうか。これはロドリゲスが「大文典」で指摘する「D、Dz、Gの前のあらゆる母音は常に半分の鼻音かソソネーテかを伴ってゐるように発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる撥音なのである」(日本大文典(1604)、訳は土井(1955(三省堂))p.637を引用)にあるような、キリシタンたちが特定の音を聞き分けて、アセント符号などをマーキングしていたのかを検討する作業である。もし付される母音字や、後続する子音で ~ と - を付す方針に違いが見られるならば、この二つのアセント符号の使い分けは、音に関わるものと想定できる。このことを検討しよう。

まず ~ と - が付される母音字に注目しよう。以下の表2に ~ と - が付される母音字ごとの使用数を示す。

・表2 各母音字に付される ~ と - の使用数

	a	i	u	e	o
バレットの ~	126	137	53	62	333
バレットの -	100	23	4	95	158
別筆者の ~	0	0	0	0	17
別筆者の -	8	2	2	4	8

表2から、別筆者の ~ のみがoに付される。ただ別筆者の ~ は子音字の上などでは付されて

いる例が確認できるところからも、oの上に付されるためだけに用いたとは考えられない。とするならば～とーは大方、各母音字に付されており、母音毎に使い分けをしているとはやや考えにくい。母音字に応じてこの二つのアセント符号は使い分けられたのではなさそうだ。

では次に、～とーが付される文字に後続する子音字の傾向を確認しよう。以下の表3で示す。

・表3 ～とーが付される文字に後続する各子音字の使用数

	c	q	g	s	x	z	j	t	d	n	f	m	y	r
バレットの～	17	6	25	59	15	4	4	27	39	176	3	20	17	1
バレットのー	9	4	27	8	3	1	44	39	52	21	27	12	1	1
別筆者の～	1	1	6	4	8	1	3	1	3	29	4	9	2	2
別筆者のー	2	0	0	3	0	0	0	3	4	0	1	0	1	1

6

表3を見ると、別筆者のーを除けば表2の母音字と同じようにすべての子音字にまたがって使用されていることがわかる。「大文典」で指摘されるD、Gの前に限らず、他の後続する子音字にも多数使用されているところからも、～とーは何らかの音と対応させる形で使用されたものでない可能性が指摘できよう。では、なぜ～とーという二つのアセント符号として使用されたのだろうか。

4. 先行研究 森田(1976)の指摘

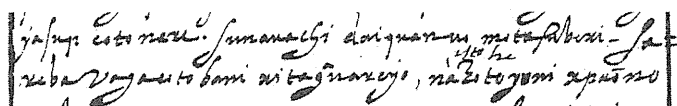
「バレット写本」で見られた二つの符号の関係について、森田(1976)は「バレット写本」ではないが、同じバレットの記した「難語句解」を精査し、日本語を記す際に～とーが共に撥音として用いられていることを取り上げ、両者は共に撥音を示すために用いられ、～とーは同じであって、書記上の都合で直線に書かれたものようである、としている⁷。バレットは「難語区解」でも～とーを同じ機能に対応する箇所 で用いたようである。ただ森田は書記上の都合を指摘しているが、その具体的な要因については触れていない。では、森田の指摘する書記上の都合とは何なのだろうか。次節ではバレットの記した「バレット写本」を精査し～とーとの書記上の都合の違いについて確認していく。

5. 物理的スペースの問題

ここまでで、この二つの符号がほぼ同じ対応箇所 で用いられていることを確認してきた。とするならば、これは同一符号の自由変異と見て取ることができるのではないかと先ほど述べた。しかし、結論から先に述べれば、この二つの符号はその用いられる環境によって使い分けられており、このことから、～とーは同一符号の環境変異であると見るのが本稿の主張である。ここで述べる環境の違いとは物理的なスペースの有無である。～とーの視覚における違いは孤を描くか、否かという違いがある。この違いが物理的なスペースの有無に応じてどの符号を使用するかを選択させるものとなる。この違いをーの現れる環境で検討していく。

5.1 文字上のスペースが無い例

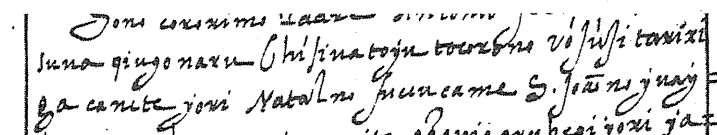
まず以下の例を見よう。



131r07-08

yafuqi coto nari. funauachi daiquanuo motafubexi. Sa=
reba vaga cotobani xitagauareyo, nãzoto yoni xpaõ no

この例で2行目の末に xpaõ とアセント符号の $\bar{\text{—}}$ が用いられている。ここでは真上にある行の文字 S が大きく記されている。この S は下の行との間にあるスペースを奪っている。そのためにこの場では \sim の特徴でもある弧を描くスペースがそもそもない。ここでは積極的に \sim を用いることができないのである。このような例は写本内で他にも確認することが出来る。



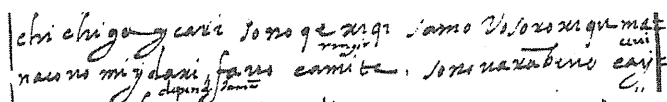
1v21-22

suaa qingo naru Chijiuatoyu tocorono vójùji tarixi
ga canete yori Natal no fuccucame S. joaõ no yuay=

この例の2行目の後方にある S. joaõ にも、 $\bar{\text{—}}$ が用いられている。これも真上にある文字 j が大きく描かれることで行間のスペースが奪われ、積極的に \sim を描くことができない。このように文字上のスペースが無いことで、 \sim ではなく $\bar{\text{—}}$ が用いられている。このような例を写本内で 79 例確認することが出来た。

5.2 後続の文字の影響で $\bar{\text{—}}$ が用いられる例

前段では縦のスペースの有無で $\bar{\text{—}}$ が記される例を確認した。しかし、 $\bar{\text{—}}$ が描かれる要因はそれだけではない。後続の文字にも影響されるようである。以下の例を見よう。

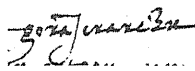


127r02-03

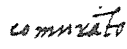
chichiga ycari sono qexiqi samo vosoroxiqu ma=
naco no miy' daxi fauo camite, sono uarãbeno cay=

この2行目の後半で用いられている uarãbe(童)に用いられている $\bar{\text{—}}$ は後続する b につなげて記されている。これは後続の文字が縦に長く記される文字であるために、 \sim の特徴でもある弧を十分に描けず、後ろの文字につなげる形で $\bar{\text{—}}$ が用いられているのではないか。このような例を他にも確認することができる。以下に示す。


- ・ j が後続する

 gorajerarezu (ご覧ぜられず) 2r16

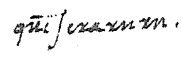
- ・ t が後続する

 comurato (蒙らんと) 64r19

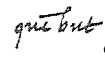
- ・ f が後続する

 vofacaray (御計らい) 216v06

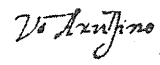
- ・ f が後続する。

 queferaruru (献せらるる) 2r07

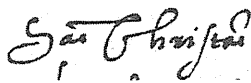
- ・ b が後続する。

 quebut (見物) 123r20

- ・ A が後続する。

 VoArujino (御主の) 79v20

- ・ C が後続する。

 SaoChrista (聖キリシタン) 269v20

ここに示した後続する文字 j, t, f, f, b, A, C に、-をつなげて用いられた使用数を以下の表 4 で示す。


・表 4 - に後続し、つなげて記された文字の使用数

	j が後続	t が後続	f が後続	f が後続	b が後続	A が後続	C が後続
使用数	37	23	22	11	8	6	1

8

ここに示した使用数だけ、-は後続する文字とつなげて用いられている。ただ、ここにあげた文字が後続する際に必ず-を用いるというわけではない。以下に例を示す。

- ・ j が後続する。

 (減じ) 231v15

- ・ t が後続する。

 tamawato (賜わんと) 2r15

このように後続する文字が縦に長くても、- が用いられないことはある。以下に表 4 で示した後続する文字の前に ~ が用いられた数を示す。

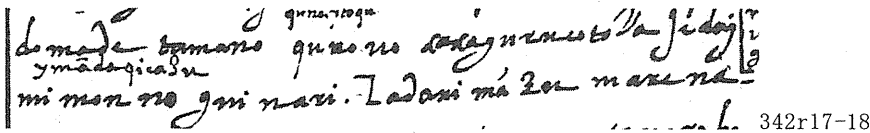
・表 5 ~ に後続する文字の使用数

	j が後続	t が後続	f が後続	l が後続	b が後続	A が後続	C が後続
使用数	4	27	3	1	10	10	2

表 4 と表 5 を見て、- は後続する文字が j、f、l の際に表れやすいといえる。また、t、b、A、C、のように ~ が用いられやすいものもある。ただ、- が表れやすい環境の一つが、後続する文字が縦に長く記されるものであることは確認することができよう。このような環境下でも - は用いられやすい。

5.3 行間注で用いられる例

「バレット写本」では行間に書写者であるバレットによって注が付されることがある。行間で付される注でこの - は多用される。以下の例を見る。



do made tamano qunouo cacagurucoto va Jeday
mimonno(ymadaqicazu) gui nari. Tadaxi mázu marena=

この例の上の行の末から下の行まで続く「前代未聞の義」という語に対し、その上部に注として「未だ聞かず」と注を施している。ここでも - が用いられている。「バレット写本」ではこのように行間に注が書き込まれる。この注は行間という限られたスペースで記されるために本文の文字より小さい文字で書かれる。このように物理的なスペースのない箇所では - が用いられやすいようである。「バレット写本」で用いられる ~ と - を本文と行間注という表れる環境で分け、使用数を数えた。以下の表 6 で示す。

・表 6 本文と行間での ~ と - の使用数

	本文での使用数	行間注での使用数
~	718	3
-	284	127

このように、行間注では主として ~ ではなく - を使用している。これも明らかに物理的なスペースのない行間注という限られた環境であるからこそ、~ ではなく、- が描かれた例といえよう。

6. ~ とーの関係

ここまでで、文字上にスペースがない場合、後続する文字が影響を及ぼす場合、行間注という物理的なスペースがない場合、とーが用いられやすい環境を確認してきた。同一の機能と対応するために自由変異と見られたこの二つの符号は、物理的なスペースによっていずれかが選択される同一符号の環境変異であるといえよう。スペースの無いところではーを用い、スペースのあるところでは~とーはどちらでもよいとしたのがこの二つの符号の関係である。この二つの符号は何らかの音と対応させるために使い分けられたものではなく、記すという行為の際の制約で使い分けられていたものである。書記という観点でこの問題を取り上げると上述の理由でこの二つの符号が使い分けされていたことが確認出来る。

7. まとめ

「バレット写本」で用いられるアセント符号の~とーは共に、撥音、濁音前鼻音、鼻音、省略と対応する箇所で見られていた。そのため一見この二つの符号は、同一符号の自由変異と捉えられそうである。しかし、ーの記される環境を細かく精査すると、この符号は物理的なスペースがない際に記されるという書記上の都合によって表されたアセント符号であることがわかった。このことから~とーは同一符号の環境変異であると指摘することができる。

文献を扱うに際し、そこに描かれる内容、事象に注目するのは大切なことである。しかし、その事象に注目するためにも、そこに描かれた情報がどのような状況で描かれたものであるのかという思慮が、新しい視座を与えてくれるものになると考えている。

ただ問題は残る。それは、ではなぜ「バレット写本」の書写者マノエル・バレットは濁音前鼻音、撥音、鼻音、省略などの複数の機能をこの符号で対応させたのか、というものである。マノエル・バレットがどのような意図を持ってこのアセント符号を用いたのか、今回の調査で導き出した結論を発展させる課題である。これは今後の課題としたい。

注

1 「バレット写本」はマノエル・バレットが1591年に日本語訳された福音書や聖人伝などをポルトガル語式のローマ字で綴った全382丁からなる文書集である。なお「バレット写本」は正式には「ヴァティカン図書館蔵写本 Reg.Lat.459.」と呼ぶべきであるが、本発表では通称である「バレット写本」と呼ぶ。

2 ~は写本内で主に母音字の上に付される半円状の形式を持つものである。本稿では~で代表させる。またーも写本内で主に母音字の上に付されるものであるが、これもーで代表させる。

3 「バレット写本」の132r-155vはマノエル・バレットとは異なる筆者によって記されている。本稿ではこの筆者を別筆者と呼ぶことにする。この別筆者は誰か特定されていない。

4 語末にある縦線は罫線である。④の例、「恩」に見られる縦の線も罫線である。

5 そもそも別筆者は濁音前鼻音を記していない。バレットがnや~などで示すことのある濁音前鼻音を別筆者はその書写箇所では記していない。これは底本の状態、書写態度などが濁音前鼻音の表記の有無につながったと考えられるが、本稿ではこのことについては言及しない。

6 行末の語に付された~とーは入れない。

7 森田(1976)pp.343-344にある。「難語区解」は大英博物館に所蔵された「天草版平家物語」(1592-1593)の巻末には手書きの難語区解のことを示す。この書写者もマノエル・バレットである。この記述は、「バレット写本」よりも後のものと推測できる。

8 表3は単に後続する子音を示したものであり、表4はつなげて書かれた子音字を取り上げたものであるため使用数は異なる。

参考文献

千葉軒士(2007)「キリシタン文献で用いられるアセント符号~について」日本語学会2007年度秋季

大会予稿集

森田武(1976)『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂

使用テキスト

「バレット写本」(1r-163rまでは『キリシタン研究 第7輯』(吉川弘文館、1962)を利用した。なお164r-368vに関しては豊島正之氏所蔵のフィルムを山田健三先生がコピーし、所有しておられた。本稿ではそのコピーを使用した。)

(ちば たかし／日本語学)